**降誕節第7主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年2月9日**

**「都合の悪い話」**

**コヘレトの言葉3章1～8節**

**3:1 何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。**

 **3:2 生まれる時、死ぬ時／植える時、植えたものを抜く時**

 **3:3 殺す時、癒す時／破壊する時、建てる時**

 **3:4 泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時**

 **3:5 石を放つ時、石を集める時／抱擁の時、抱擁を遠ざける時**

 **3:6 求める時、失う時／保つ時、放つ時**

 **3:7 裂く時、縫う時／黙する時、語る時**

 **3:8 愛する時、憎む時／戦いの時、平和の時。**

**使徒言行録24章24～27節**

**24:24 数日の後、フェリクスはユダヤ人である妻のドルシラと一緒に来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスへの信仰について話を聞いた。**

 **24:25 しかし、パウロが正義や節制や来るべき裁きについて話すと、フェリクスは恐ろしくなり、「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言った。**

 **24:26 だが、パウロから金をもらおうとする下心もあったので、度々呼び出しては話し合っていた。**

 **24:27 さて、二年たって、フェリクスの後任者としてポルキウス・フェストゥスが赴任したが、フェリクスは、ユダヤ人に気に入られようとして、パウロを監禁したままにしておいた。**

1.

**「都合の悪い話とはどういう意味ですか」。私は今回の説教の準備をする中でパソコンを使って調べ物をしていたらあるサイトにこのような質問と答えが載っていました。**

**質問「都合の悪い話とはどういう意味ですか」**

**答え「話したくないこと。議論が起こる話など。」その例として「政治家は都合の悪い話をしない」「彼は都合の悪い話になるといつも黙ってしまう」と書かれてありました。**

**確かにそうだと思います。これは政治家でなくても私たち人間は誰しもが自分にとって都合の悪い話は話したくないですし、聞きたくないものです。「この話をすることは自分にとって都合が悪くなる」と思うとその話はしないものです。また、会話をしていて「これは都合が悪くなりそうだな」と思ったら、しれっと話題を変えて都合の悪い話を聞かないで済むようにします。それはその話をしたり聞いたりすることで自分が不利益を被るかもしれないからです。心が穏やかでいられなくなるからです。ですから一種の自己防衛の反応として、自分にとって都合の悪い話はしないでおくし、また聞かないようにすると言えるのです。**

**教会の礼拝で牧師が語る説教を聴いて、これは自分にとって都合が悪い話しと感じることがあります。語る牧師は別にその人を責めようという思いはないのですが、聞く方が何か自分を責められているような思いになることがあります。しばしば聞く話ですが「教会では罪・罪と聞かされて嫌になる」と言う人がいます。それはその人が何か罪の自覚があるから罪の話が自分にとって都合が悪いと感じるのです。そして中にはそんな話はもう聞きたくないといって教会に来なくなる人もいるのです。それはとても残念なことですが、「罪」と聞いて都合が悪いと感じたり何か心を動かされるのは次のステップに進むチャンスであるのかなと思います。**

**考えてみれば、牧師が語る説教はかならずしも都合の良い話ばかりではありません。「あなたは愛されています」「あなたはそのままで素晴らしいのです」それはそれでもちろん事実なのですが、そのような耳障りの良いことしか語らない牧師がもしいたとしたら、その方が教会にとって都合の悪いことになるのです。イエス様の十字架と復活の愛が正しく語られるには、やはり罪の問題を抜きにしては語れません。罪があるから赦しがあって救いがあるのです。ですから教会の礼拝で語られる説教というのは私たちにとって都合の悪い話であり、耳障りな話なのかもしれません。私たちはそこで心を動かされて動かされた心をどうするのかということが神様からいつも問われていると思うのです。**

**パウロはカイサリアで監禁されていました。それは総督フェリクスがパウロの裁判を延期したからです。ただパウロはある程度の自由が与えられ友人たちがパウロの見の回りの世話をすることは許されていました。**

**数日してフェリクスはユダヤ人である妻のドルシラと一緒にパウロの話を聞くために呼び出しました。一説によるとドルシラがパウロの話を聞きたがっていたようです。彼らはキリスト・イエスの信仰について話を聞きました。最初は興味深く聞いていたのでしょう。イエスというお方がベツレヘムの馬小屋でお生まれになられ、成人して弟子たちを連れて神の国の福音を宣べ伝え、多くの病人を癒し、そういった話を聞いて関心を示していたのでしょう。ところがパウロの話が「正義や節制や来るべき裁きについて」の話になるとフェリクスは恐ろしくなり「今回はこれで帰ってよろしい。また適当な機会に呼び出すことにする」と言って彼は「この話をされるのは都合が悪い」と思って逃げたのです。なぜフェリクスはパウロの話に恐れを抱き、都合が悪いと思ったのでしょう。**

**それはフェリクスに思い当たる節があるからです。フェリクスの妻であるユダヤ人女性ドルシラは使徒言行録12章に出てくるヘロデ王の娘です。さらにはイエス様誕生の時のヘロデ大王のひ孫に当たる人物です。そんなドルシラは小さな国の王様と結婚しましたが、フェリスクがドルシラの美貌に一目ぼれして魔術師の力を借りてドルシラを奪い取って自分の妻としたのです。かつてウリヤの妻であるバトシェバを奪って自分の妻としたダビデ王と同じようなことをしたのです。ダビデはそのことで預言者ナタンに罪を指摘されて自分が犯してしまった罪の重さから神様に悔い改めました。**

**では、パウロはフェリクスとドルシラの関係を知っていてそれを指摘してそれを責め立てることを語ったのでしょうか。預言者ナタンがダビデを責めて「その男はあなただ。あなたはヘト人ウリヤを剣にかけ、その妻を奪って自分の妻とした。」と非常に厳しく叱責したように、パウロはフェリクスに厳しく責め立てて「神に立ち帰れ」と強く迫ったのでしょうか。**

**パウロがフェリクスとドルシラに語ったのは「正義や節制や来るべき裁きについて」です。「正義」とは私たち人間の正しさのように思ってしまいますが、原語は「義」です。しかも「神の義」です。「神の正しさです」。イエス様の十字架の死と復活によって私たちに現わして下さった神様の愛ということができます。「節制」は辞書的な意味では自分の感情や欲望を抑えることですが、ここでは神の義にふさわしい生き方をすること、イエス様の十字架と復活によって罪赦され救われた私たちが救われた者としてふさわしい生き方をすることです。いわばキリスト者の生き方を語るのです。そして「来るべき裁きについて」は終末時の最後の審判のことです。私たちが礼拝ごとに使徒信条で「かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」と信仰の告白をしていますが、その最後の審判のことです。**

**ですからパウロが語ったのは、イエス様の十字架と復活の事、救われた者の相応しい生活の事、終末の事なのです。何か特別なことを語ったというのではなくていわば説教をしたのです。教会の礼拝で礼拝ごとに語られる説教をパウロは語ったのです。フェリクスはパウロが語る説教を聞いてやましいことがあるだけに罪の自覚は生じたのでしょう。彼は恐ろしくなりました。罪ゆえに心動かされたのでしょう。ただ彼は、その動かされた心にそれ以上向き合うことから逃げて、これ以上都合の悪い話しは聞きたくないと、「また今度」と心の揺れに蓋をしたのです。その後もパウロを呼び出して話を聞きますが、彼はパウロからお金をもらうことが下心にありました。保釈をすると言えばお金をもらえるんじゃないかとか色々考えられていますが、要するに賄賂目的です。パウロがイエス様の十字架と復活の事、救われた者の相応しい生活の事、終末の事を語る説教をすると、「都合の悪い話しは聞きたくない。それはまた今度」とというやり取りが繰り返されたのではないかと思います。**

**こうしてフェリクスもドルシラも都合の悪い話しを聞くことを嫌がり、心動かされたその心に蓋をしてしまって、イエス様を救い主と信じる信仰には至らなかった、「この道」をイエス様と共に歩むことはしなかったと考えられています。**

**ペンテコステの日に聖霊に満たされたペトロが声を張り上げて語りました。ユダヤ人に向けて説教をしたのです。その様子が2：14から記されています。ここでペトロが語る説教は非常に厳しい内容です。イエス様こそが救い主であることを語り、イエス様の十字架の死と復活を語ります。説教の結びの36節でペトロはこう語るのです。**

**「だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」**

**ペトロははっきり言います。あなたたちがイエス様を十字架につけて殺したんだ、イエス様を十字架につけて殺したのは他でもないあなたたちだ、あなたたちはとんでもない罪を犯してしまったんだ。あなたたちが殺したイエスを神は救い主とされたのだ。**

**このペトロの説教こそ聞いていたユダヤ人にとっては都合の悪い話しです。こんなことは言われたくない、こんな話は聞くたくないと、私が殺人犯だなんてなんてひどいことを言うんだ、あるいは恐ろしくなった人もいるでしょう。**

**37節には「人々はこれを聞いて大いに心を打たれ」と記されてあります。心に雷が落ちたように大いに心が動かされたのです。不安、恐れ、憤り、悲しみ、色んな感情が溢れてきたのです。それでも彼らはフェリクスのようにその心の動きに蓋をして、「また今度」と逃げたでしょうか。その感情に向き合いたくないと心を閉ざすようなことをしたでしょうか。決してそうではありません。「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」自分たちが多いに心を打たれ心を動かされたその思いを正直に告白します。ペトロは言います「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。」ペトロのこの言葉を受け入れた人々はすぐに洗礼を受けてその数が3千人であったと記されています。**

**「わたしたちはどうしたらよいのですか」大いに心を動かされて、自らの罪としっかりと向き合うのです。それは大いに心揺さぶられる苦しいことかもしれません。「私はイエス様を十字架につけてしまった罪人です」と神様に罪を告白するのです。罪人であることを神様に告白し、神様に「どうすればいいのですか」と祈りゆだねるのです。そうする中で聖霊の導きによってイエス様はこの私の罪のために十字架にかかって死んでくださったという罪が赦されていることに、私は救われているという大きな恵みに気づかされるのです。フェリクスやドルシラのように逃げてはいけないのです。**

**パウロは結局2年間カイサリアで監禁されました。ローマに早くいきたいパウロにとって2年間カイサリアで足止めを食うというのはパウロにとっていわば都合の悪いことです。**

**パウロはその2年の間フェリクスとドルシラに聞いてもらえないのは分かっていても「正義と節制と来たるべき裁きについて」つまり説教をし続けました。また今度と言われても語り続けたのでしょう。**

**そしてパウロがこのカイサリアでの監禁生活の中でもう一つのことをしました。これは色んな説があり定かではないのですが、この監禁生活の2年間に獄中書簡と呼ばれる手紙を書いたかもしれないと考えられています。獄中書簡とは「エフェソの信徒へ手紙」「フィリピの信徒への手紙」「コロサイの信徒への手紙」「フィレモンへの手紙」の4つの手紙です。もしこの4つの手紙を書いたのがこのカイサリアでの監禁生活の時ではなくても、パウロはフェリクスたちに語ると共に、静かに黙する中で神様と向き合って祈る時を持っていたでしょう。「黙する時、語る時」（コヘレト3：7）とあるようにです。パウロはこの2年間もまた「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」（コヘレト3：1）神様が供えられた時であると神様に信頼してその時を過ごしたと思います。2年間も足止めなど都合の悪いことであり、都合の悪い話しです。しかし、その時もまたパウロはイエス様に全てをおゆだねして、イエス様と共に「この道」を歩んだのです。**

**都合の悪い話し、都合の悪いこと、私たちがこの世の旅路を歩む中でそのようなことはたくさんあります。心揺さぶられ、心動かされて恐れに取りつかれることがたくさんあります。そんな時に私たちは都合の悪いことは聞きたくない、都合の悪いことはしたくないと逃げてしまうのか、その時もまた神様が備えてくださっている時であると信じておゆだねして、イエス様と共に「この道」を歩んでいくのかそのことが常に私たちに問われているのです。**

**それは言い換えますならば扉をノックしてくださっているイエス様のノックの音をこれ以上聞きたくないと無視をするのか、イエス様を部屋にお招きして私の罪のために死んでくださったイエス様に全てをおゆだねして、イエス様と共に「この道」を歩むのかがいつも私たちに問われているように思います。**

**イエス様はどんな時にも私たちと共に歩んでくださいます。これは真実です。**